

## ○ヒマラヤのシダの植物地理 (伊藤 洋) Hiroshi ITO: Geography of the Himalayan ferns

私は東京大学インド植物調査隊(隊長原寛教授)が1960年と1963年の2回にわたって採集したシダを調べる機会に恵まれた。先般終って結果を報告したついでに、私の分担した部分(全体の約半分)についてヒマラヤのシダの地理的分布を考えてみた。取り扱った種類の数(変種以下は省略)はゼンマイ科2, カニクサ科3, ウラジロ科3, ワラビ科52, ミズワラビ科1, シノブ科9, キジノオシダ科1, オシダ科(これは全部でない, オシダ属など12属)35, シシガシラ科1, チャセンシダ科13, シシラン科9, デンジソウ科1, サンショウモ科2, 計132である。ただしこのうちの1種(*Pityrogramma calomelanos*)は栽培品の逃げ出したものと思えるので、これを除外し、結局131種について考えることにした。調査地域は第1次がダージリンとシッキムで、標高250 m から4000 m にわたっており、第2次は東部ネパール、200-3000 m である。したがって植物帯的には幅が広く、熱帯から亜高山帯までを含んでいる。

**おもな地方との共通種** まず日本との共通種は131のうちの36で、割合をとると27%となる。例をあげると、ゼンマイ、オニゼンマイ、カニクサ、コシダ、コバノイシカグマ、ホングウシダ、イワヒメワラビ、オオバノイノモトソウ、ナチシダ、ホラシノブ、ホウライシダ、タマシダ、ジョウレンシダ、ホウビシダ、シシランなどである。次に台湾との共通種は85(65%)で、今まで台湾特産とされていて今回ヒマラヤにも産することがわかったものも数種ある。中国との共通種は90(69%)、この値は台湾のと比べて案外小さいが、これは中国特に雲南省方面のシダについての発表が最近少ない(または手にはいらない)ためであると思う。陸続きの近い場所だからもっと多いはずである。最後にヒマラヤ固有種は6、これは5%に当る。

**分布の型** これは次の4型にまとめることができる。

- 1) 寒い方のもので、シベリアやカラフト方面から南下してヒマラヤでとまっているもの。これは4(3%)しかない。日本に関係あるものとしてはゼンマイ、オニゼンマイがある。
- 2) インド、インドシナ、マレイ諸島など、南の方に本拠をもつもので、ヒマラヤまで北上して来るもの、84(64%)。この大部分(54)は中国および台湾にもあり、さらにそのうちの35は日本まで来ている(前記日本との共通種の例のうちゼンマイとオニゼンマイを除いたものは皆これの例)。同様に琉球止まりのもの3(ヒロハカニクサ、オオイシカグマ、ホコシダ)を数える。次にこのような南の型のうちで、台湾にあるが中国にないというものが8、その逆のものが9、そして最後に台湾にも中国にもない、つまりインドやインドシナの種類のヒマラヤの低い所まで来ているという形のもの、これが13となっている。
- 3) 北緯25°-30°付近で東西に分布するもの、すなわち台湾、中国南部、ヒマラヤ、

カシ米尔(場合によってはアフガニスタンや以西にも)と横に細長く分布するものが 37 (28%) ある。その内訳は: 大体これらの地域に広く行きわたるもの 11, 中国を飛ばしてヒマラヤと台湾にあるもの 10 (スジオシダ, ケヒメワラビ, ホウライクマワラビ, サカゴケシダ, イトシシランなど), 台湾になく中国以西のもの 14, ヒマラヤ以西のもの 2, となっている。

(東京教育大学理学部)

### Summary

A half of the fern specimens collected by the Indo-Japanese Botanical Expedition to Darjeeling and Sikkim in 1960, and that to East Nepal in 1963 was allotted to me for study. They belong to the following families: Osmundaceae, Schizaceae, Gleicheniaceae, Pteridaceae, Parkeriaceae, Davalliaceae, Plagiogyriaceae, Aspidiaceae p.p., Blechnaceae, Aspleniaceae, Vittariaceae, Marsileaceae, and Salviniaceae. I have identified 131 native species in them, and classified several distribution patterns from the area occupied by each species.

### 〇クサボケの八重咲品 (檜山庫三・小林義雄) Kozo HIYAMA & Yoshio KOBAYASHI: A new form of *Chaenomeles japonica*



Fig. 1. *Chaenomeles japonica* f. *plena* in bloom. Specimen from the type locality.  $\times 1/4$ .

YASHI: A new form of *Chaenomeles japonica*

1966 年 4 月 23 日, 東京都八王子市元八王寺町の城山の麓で出会ったクサボケは, どの株も八重咲きであった。大部分の花は雄性花であって, 11~13 枚の花弁があるが, この花弁の増加は雄蕊の弁化によるもので 雄蕊は 36 本内外であった。なお, この八重咲品は林業試験場浅川実験林内にもあることがその後にはわかった。和名をやエクサボケとする。

*Chaenomeles japonica* Lindl.

forma **plena** Hiyama et Kobayashi-Yoshio, n. f.

Flores pleni. Petala 11-13.

Hab. Moto-hachioji, Hachioji, Prov. Musashi (Hiyama & Kobayashi. April, 1966), type in MAK.